

良寛と芭蕉

―付手毬考―

蔭木英雄

表題に、時代の新しい良寛を先に掲げたのは、芭蕉に関連づけながら、良寛の文学的精神的境界を述べたい意図からである。大愚良寛に、

① 芭蕉翁

是翁以前無此翁 是翁以後無此翁

芭蕉翁 芭蕉翁 使人千古仰此翁

という作がある。良寛は、

② 孰か我が詩を詩と謂う 我が詩は是れ詩に非ず 我が詩の詩に非ざるを知って 始めて与に詩を言うべし

(雑詩)

というように、平仄押韻など詩律に嫻う事なく、胸奥の詩情をそのまま吐露する詩人であった。①はまさに大愚良寛の芭蕉景仰の念を、二十七字に率直に表出した作品である。又、

嘗謂人曰、「貧道不嗜者三。曰、詩人之詩、書家之書、庖人之饌是也」(藏雲「良寛道人略伝」)

とあるように、良寛は詩人臭のある詩を嫌っていた。

ところで、良寛の「法華讀」常不輕菩薩品に、

③ 斯人以前無斯人 斯人以後無斯人

不輕老今不輕老 令我人長慕淳真⁽⁴⁾

という作があり、①と殆ど同じ語句を連ねている。「斯人」は『論語』雍也篇に、孔子が伯牛⁽⁵⁾を見舞って、「命なるかな。斯の人にして斯の疾有るや斯の人にして斯の病有るや」と歎いた用例があり、斯の人つまり冉伯牛は孔門では顔回と共に徳行の士であった。この③には細字で、

讚歎不輕、不覺全身入草（常不輕菩薩が人々を讚歎するので、つい納⁽⁶⁾は全身を草むら（草庵）に隠した⁽⁷⁾）という下語⁽⁸⁾がついている。①③をあわせ読むと、すべての人に仏性の有る事を認めて、遇う人ごとに、「われ常に汝を軽んぜず」と自己を捨てて礼拝した常不輕菩薩と、俳聖松尾芭蕉との二人を、良寛は重ね合わせて景仰しているのである。

④ 比丘はただ万事はいらず常不輕菩薩の行ぞ殊勝なりける
という歌もある。

⑤ 芭蕉翁

脱落心身無人委 千古秋風夕陽斜

という二句の賛がある。しばらく字句の穿鑿を試みよう。脱落心身は、中国の天童如淨禪師⁽⁹⁾が永平道元を印可した時に用いた「脱落心身」に拠っている。道元の『正法眼藏坐禪箴』には、

恁麼⁽¹⁰⁾の功夫を脱落心身といふ。いまだかつて坐せざるものに、この道のあるにあらず。

と、坐禪即脱落心心が説かれ、『正法眼藏現成公案』には、

仏道をならふといふは、自己をならふ也。（中略）方法に証せらるるといふは、自己の身心、および他己の身心

をして脱落せしむるなり。

と、自己をならうことが脱落身心だと道元は述べている。つまり、良寛は⑤で、悟達した芭蕉翁を賛えているのである。また、良寛の故郷出雲崎の隣の尼瀬出身で、年少の友の大忍魯仙は、

良寛老禪師 如愚又如痴 身心総脱落（「懐良寛道人」）

と、この語を用いて、大愚良寛が大悟した事を懐古しているのも、注意しておかねばならない。ところで、⑤の第二句を読んで筆者は、

あかあかと日はつれなくも秋の風

この道や行く人なしに秋の暮

という芭蕉の句を想起するのである。そして後者の句から、こんどは③の、

斯の人以前に斯の人無く、

斯の人以後に斯の人無し

の句を回想する。さらに筆者の連想は、

⑥ いそのかみふるの古道さながらにみ草ふみわけ行く人なしに

⑦ ますらをの踏みけん世々の古道は荒れにけるかも行く人なしに

の良寛の歌へと続いていく。作品は作者の手を離れると、作者の思いもしなかった解釈が施され、独りあるきする。

多くの豊かな分析・解釈が可能な作品ほど文学的価値は高くなる——という価値基準もある。多面的な分析と帰納に努めるのが文学研究者の一つの責務である。但し、根拠のない分析は、主観的空想的評論に陥ることを自戒せねばならぬ。⑥の古道とは、道元たち「ますらを」が開いた古仏の道でもある。

前述の「法華讚」の余白に、良寛は、

うたがふな汝の花も浦の春

という芭蕉の句を書き入れており、芭蕉の句集あるいはそれに類したものを見ていたと思われる。では、良寛と芭蕉とを結びつける接点は何処にあったのだろうか。

まず第一に中世の歌人西行が考えられる。芭蕉が西行の足跡を辿って、

上の・谷中の花の梢、またいつかはと心ほそし。

と述懐して、奥の細道の旅に出たことは、周ねく知られている。一方、良寛は万葉集を学んだが、西行の歌もよく読んでいた。良寛の、

⑧ 西行法師の墓に詣でて花を手向けてよめる

手折り来し花の色香はうすくともあはれ見たまへ心ばかりは

という歌は、西行の、

仏には桜の花を奉れわが後の世を人とぶらはば

を本にしていることは明らかで、このほか、

⑨ 乙宮の森の下屋の静けさにしばしとてこそ杖をさしけれ（良寛）

道のべの清水流るる柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ（西行）

⑩ あしびきの岩間を伝ふ苔水のかすかに我はすみ渡るかも（良寛）

とくどくと落つる岩間の苔清水汲みほす程もなきすまるかな（西行）

など、両僧の類似する歌をあげればまだまだある。後鳥羽院は隠岐島で、

西行はおもしろくて、しかも心も殊に深く、ありがたくいできがたき方も共に相兼ねて見ゆ。生得の哥人とおほゆ。(「後鳥羽院御口伝」)

と記された。「詩人臭のある詩は嫌いだ」と言った良寛は、歌人臭のない生得の歌人西行の歌を好んだのであろう。

良寛・芭蕉接点の第二に、「北越蕉風中興の棟梁」と称せられた父の山本以南がある。

橘屋山本家は代々越後出雲崎の名主を務めていた。良寛の父母は夫婦養子となつて山本家をつぎ、父は俳号を以南と称した。しかし、名主としての政治的能力に欠け、彼の代に山本家は没落しはじめる。その原因の二に、隣町尼瀬の京屋との紛争があつた。山本以南は若くから近青庵北溟に俳諧を学び、北溟の紹介で、遠く名古屋の美濃派の暮雨庵暁台を訪ね、暁台も後に越後に来ている。暁台中の『豎並集』には以南の八句が入集しており、その中に、

阿ら海も月の朧となる夜哉

蟹が子の牛に踏まるる手毬哉

という句がある。後者の句を筆者流に深読みしてみると、「蟹が子の牛(漁師の子がひく牛)は尼瀬に通じる。する」と、牛は尼瀬の新興勢力京屋を表わし、手毬は京屋に庄しつぶされそうになつて、俳諧の風雅に逃避する橘屋山本以南を象徴しているかのである。後述の良寛の手毬をも連想させて興味深い句である。前者の「阿ら海も」の句が、芭蕉の「荒海や佐渡に横たう天の川」を念頭に置いていることは、まずまちがいあるまい。以南は寛政六年、即ち『奥の細道』から百五年目に、芭蕉の足跡を慕つて奥州に旅立ち、旅行を終えるとすぐ上洛して、桂川に身を投じて自殺した。上洛の途中、柏崎で、

荒海や闇をなごりの十三夜

と、又もや芭蕉の句を下敷にして句作しているのである。良寛は、

11 いにしへに変わぬものは荒磯海ありそみと向ひに見ゆる佐渡の鳥なり

12 天も水もひとつに見ゆる海の上に浮かびて見ゆる佐渡が鳥山

13 たちねの母がかたみと朝夕に佐渡の鳥べをうち見つるかも

と亡き母（佐渡出身）を歌う時、流人の鳥佐渡を吟じた芭蕉や、死出の上京の父の句を思い浮べなかつたであろうか。

次に即物的だが、大愚良寛と松尾芭蕉の第三の接点に、芭蕉（植物）を置いて、考え味わつてみたい。

周知の如く、天和元年春、松尾桃青は門人李下から贈られた芭蕉の株を、深川の草庵に植えて芭蕉庵と称した。良寛も、

14 わが宿の軒端に植ゑし芭蕉葉に月はゆつりぬ夜はふけぬらし

と歌っているように、五合庵か乙子社の庵か不明だが、軒端に芭蕉15を植えていた。

15 窓前芭蕉樹 亭々弘雲涼 読歌又賦詩 終日坐其傍

窓への芭蕉は高く伸び、良寛はその傍でひねもす詩歌を詠んだ。そして、

16 芭蕉夜雨

昏夢易驚老朽質 灯火明滅夜雨過 撫枕静聞芭蕉雨 与誰共語此時情

と、芭蕉夜雨の音に、さびしさの極みを越えた詩情を、体の底に響かせている。

17 托鉢

八月初一日 托鉢入市廓 白雲従高歩 金風揺玉環 万户千門味且開 脩竹芭蕉入昼看18 次第乞食

西又東 酒肆魚行什麼論（後略）

18 芭蕉

昨夜秋風破芭蕉葉 宛似東大寺和尚破袈裟

[17][18]は明らかに『正法眼蔵画餅』の、

先師道、脩竹芭蕉入画図。

この道取は、長短を超越せるものの、ともに画図の参学ある道取なり。(中略)芭蕉は、地水火風空・心意識智慧を、根茎・枝葉・華果・光色とせるゆゑに、秋風を帯して秋風にやぶる、のこる一塵なし、浄潔といひぬべし。に拠っているのである。「長い竹と短い芭蕉とが、一幅の絵画の中に納まっている」という天童如浄禅師の言葉に対する道元の下語が、長々と述べられているのだが、背の低い芭蕉は浄潔の象徴とされているのである。

大愚良寛と松尾芭蕉とを繋ぐ第四の接点は、言うまでもなく禅・仏法である。これは[5]で既に明らかであるが、蛇足を加えよう。松尾芭蕉は三歳年長の仏頂和尚に参禅した。仏頂和尚が住持していた瑞巖山根本寺(茨城県鹿島郡鹿島町)は、鹿島神宮と寺領の紛争が絶えず、仏頂和尚は延宝二年に幕府に提訴して以来、屢々出府して深川の臨川庵を宿所とした。芭蕉の深川草庵定住は延宝八年で、この頃より臨川庵の仏頂和尚に参禅したと思われる。天和元年に作った、

枯枝に烏のとまりたるや秋の暮

の句は、談林から蕉風への転機の句と言われている。^[16]芭蕉翁遺品の中に、仏頂禅師より付与された鉄如意・紙縷袈裟があるのは、芭蕉が仏頂禅師から印可された証左であろう。仏頂和尚と芭蕉は臨済宗、良寛は曹洞宗に属していて、宗派は異なっているものの、区々たる宗派に拘らぬ良寛は、^[17]脱落身心の芭蕉を景仰したのである。

「枯枝に」の句に秋の暮の烏が吟じられるので、甚だ短絡的だが、良寛が烏を詠った「秋暮」を読んでみる。

[19] 秋暮

秋気何蕭索 倚杖風稍寒 孤村苦霧裏 行人野橋辺 老鴉宿故林 斜雁没遙天 唯有緇衣僧 立
尺暮江前

秋の気は何とさびしいことよ 杖によりかかっていると風がうすら寒い ぼつんとある村は深い霧に包まれ

人影が野中の橋を通り過ぎる 老いた鳥は馴染の林のねぐらに帰り 斜の列の雁は空の彼方に消えていく(み

な空) ただ黒衣の僧(私)だけが 夕暮れの川岸にたえずむ

筆者は頸聯「老鴉宿故林 斜雁没遙天」を、出生地の出雲崎に住めない侘びしさと解する。「鶉鳥は旧林を恋う」

(「帰園田居」)は、望郷の陶淵明の句であった。

20 われ喚て故郷へ行くや夜の雁

21 蘇迷廬の音信告げよ夜の雁

は故郷や亡父を恋う良寛の句である。良寛は20の老鴉や斜雁で、所払いとなった山本家(自分も)の没落悲運を詠つ

ているかのようにである。暮れなずむ川岸に立ち尽くす黒衣の僧は、あたかも枯枝にとまる鳥の姿に似て、坐禅ならぬ

立禅三昧の孤影であり、

この道や行く人なしに秋の暮

の句境である。

○

○

良寛さんが芭蕉翁と決定的に違うのは、里の子供たちとの遊びである。

22 子供らと手毬つきつつ此さに遊ぶ春日は暮れずともよし

23 風さそふ柳のもとに団居して遊ぶ春日は心のどけき

24 雑詩

青陽二月初 物色稍新鮮 此時持鉢孟 得々遊市鄴 兒童忽見我 欣然相将来（中略）于此闢百草

于此打毬子（後略）

玉島円通寺を出て諸国行脚の後、越後に帰国した良寛さんは、子供たちと無心に遊ぶ（出雲崎町では毎月六日の良寛の命日は、子供を叱らぬ日になっているという）。つい「無心に遊ぶ」と筆をすべらせたが、現在、群馬県新田町木崎の共同墓地に眠る飯盛女（墓石の彫字をたどると、越後蒲原郡つまり良寛の里から売られた娘が多い）の少女時代が、良寛の遊び相手だった公算は大きく、はたして良寛さんは無心であったかどうか……。しかし良寛さんの遊びは、『梁塵秘抄』巻二の、

遊びをせんとや生まれけん

戯れせんとや生まれけん

遊ぶ子供の声聞けば

我が身さへこそ動かるれ

という遊びの底をつき破るものがあつた。良寛さんの遊びは、

25 聞之則物故

（前略）昔号二三子 翱翔狭河間 以文恒会友 優游云極年 何況吾与子 曾遊先生門（後略）

というように、家郷を離れて学ぶことであり、

26 雑詩

（前略）伊昔少壮時 飛錫千里游 頗叩古老門 周旋凡幾秋 所期在弘通 誰惜浮漚身（後略）

と、仏法の弘通を期した遍歴修行が良寛さんの遊びだったのである。それは、五合庵や乙子の森に閑居するようになってからも、同様であった。

〔27〕世の中にまじらぬとはあらねどもひとり遊びあそびぞわれはまされる

この歌は、灯下に読書する自画像の賛なので、遊びは〔25〕の求道就学に通じ、

〔28〕 題不倒翁

任人投今任人笑 更無一物当心地 寄語人生若似君 能遊世間有何事

お前は人に投げられても笑われても平氣の平左 全く物事に拘わらない 言ことば伝つたしよう「人生を君のように送れ

ば 俗世を何事もなく渡ることが出来る」と。

たぶん良寛さんは、不倒翁即ち達磨の起上り小法師で子供たちと遊んだのであろうが、〔28〕の結句の遊は、

諸仏はこの神通のみに遊あそび戯あそするなり。(中略) しかあれば、仏道は必ず神通より達するなり。(『正法眼藏神通』)

の遊戯と同義である。

良寛さんは子供たちと草ずもう、おはじき、かくれんぼなどして、永い春日を過したが、良寛さんと言えばやはりまり穠もつきであらう。晩年の愛弟子貞心尼の『蓮の露』の冒頭の贈答歌は、

師常に手まりをもて遊び玉ふとききて奉るとて

これぞこのほとけのみちにあそびつつくやつきせぬみのりなるなむ

〔29〕 御かへし

つきてみよひふみよいむなこのとをとをさめてまたはじまるを

に始まる。良寛さんの穠つき遊びは仏の御法みのりだったのである。一ひ二ふ三み四よ五い六む七な八や九こ十のを繰り返しくりかえしし、上

田三四二氏の言葉をかりると、

零が時間の尻尾を呑み、時間をして円環たらしめる。そして、かくして生じる円環はまたそれ自身、まぎれもなく大きな零を象っている。

という無限回帰の仏道が、良寛さんの手毬遊びだったのである。[24]の後略の部分を補って読みなおしてみる。

[30] 雑詩

(前略) 我打渠且歌

我歌渠打之

打去又打来

不知時節移

行人顧我笑

因何其如斯

低頭不応

伊 道得也何似

要知箇中意

元来只這是

良寛さんが毬をつくると子供が歌い、良寛さんが歌うと子供が毬をつく。その歌とは、

一つ火箸で焼いた餅 二つふくふくふくれ餅 三つ見事なきなこ餅 四つよこれたあずき餅 五つ因果

なかぶれ餅 六つむくむくこぬか餅 七つ七草ぞうに餅 八つ弥彦へあげる餅 九つこころへくばる餅

十は殿さんあげる餅 (長岡市大島町)

のような毬つき歌を唄ったのだろうか。[30]の波形傍線の、“打ち去り又打ち来り 時節の移るを知らず”が無限回帰の仏道なのであり、傍線の“箇中の意”はその毬つき三昧の意旨をさす。それはいくら訊ねられても、分別的常識的言語で答えられる筈はなく、ただ、“これは是れ”と返事するのみであった。

『正法眼蔵』弁道話で、道元は、

仏在世にも、てまりによりて四果を証し、袈裟をかけて大道をあきらめし、ともに愚暗のやから、癡狂の畜類なり。ただし正信のたすくるところ、まどひをはなるみちあり。

と、正信に助けられるならば、愚暗痴狂の輩でも、てまりによって証りの道に入り得ると述べている。大愚良寛はま

たごい、

兒童相見共相語 去年癡僧今又来 (「乞食」)

無心逐流俗 信人呼癡獸 (「雜詩」)

生涯何所似 從縁且養癡 (「雜詩」)

と、愚癡を自認して、子供たちと手毬をついていたのである。親鸞上人も「愚禿親鸞」と自称しておられる。小愚になる事は難しくないであろう。大愚・愚禿に徹することは易行道であろうか。難易の相対を超えなければ、至道無難(「信心銘」)の境に達し得ない。

31 毬子

袖裏繡毬直千金 袖裏の繡毬 直千金

謂言好手無等匹 謂えらく言は好手 等匹無しと

箇中意旨若相問 箇中の意旨 若し相問わば

一一三三四五六七 一一三三四五六七

袖の中の刺繡した毬は千両の値打ちがあり「わしほど毬つきの巧い者はおらんぞ」と思う「毬つきの極意は何だ」と訊ねられたら 衲は「一一三三四五六七」と答えよう。

煩雑をいとわず、詩句の用語例を穿鑿してみよう。実はこれが拙論の後半の山なので、辛抱して目を通して頂きたい。

○袖裏Ⅱ(1)『正法眼藏行持』つねに袖裏に蒲団をたづさへて、あるひは岩下に坐す。○繡毬Ⅱ(2)『統伝灯録』『禪苑蒙求』に拠ると、ある僧が浮山法遠に誰の法を嗣いだのかと問うと「八十翁々鞞繡毬」と答えた。○直千金Ⅱ(3)蘇軾

「春夜」春宵一刻直千金。○箇中Ⅱ(4)陶淵明「飲酒」此中有真意 欲弁已忘言 (5)『正法眼藏三昧王三昧』外道魔党の

項頸を踏翻して、仏祖の堂奥に箇中人なることは、結跏趺坐なり。(6)良寛「雑詩」不知箇中事 永劫托苦莘 (7)良寛「雑詩」有人若問箇中意 箇是從來榮藏生 ○問(8)陶淵明「飲酒」(4と同じ)問。君何能爾 (9)李白「山中答俗人」問。余何事栖碧山 笑而不答心自閑 (10)良寛「夢中問答」問。我師胡為 老此紅塵中 (11)良寛「雑詩」大道打毬百花春 前途有客若相問 我是昇平一閑人 ○一二三四五六七(12)「碧巖録」二十一則「僧智門に問う、蓮華未だ水より出ざる時は如何。智門云く、蓮華。僧云く、水より出でし後如何。智門云く、荷葉。」(一二三四五六七、天下の人を疑殺す)

道元は(1)のように、常に袖裏に蒲団を入れていて、岩下に敷いて坐禅していた。一方、良寛の袖裏には繡毬があった。故に、良寛さんの毬つきは坐禅道であったと言い得よう。語注(2)の浮山法遠(991-1067)の、「八十の翁々繡毬を鞞がす」という言葉は、誰それ禪師の法を嗣いだなどと拘わらない、執着を離れた浮山和尚の境涯を言っているのである。従って(3)の起句は、無心無執着の毬つきなのである。それは又、「春宵の一刻は直千金、花に清香有り月に陰有り」と蘇東坡が詠うように、風流の極致の毬つきであった。

真実・真理というものは、相対的分別的な言葉では言い表せない。『大般涅槃經』嬰兒行品に、

如來世尊は是れ有為に非ず。是の故に説無し。又語無きは猶お嬰兒の言語未だ了せず、復た語有りと雖も実に語無きがごとし。如來も亦爾り。

とあり、如來も子供と同じく真理を説く言語が無かったと述べている。良寛さんが子供たちと遊ぶのは、この「嬰兒行品」の実践だったと言える。

古來、詩人は語注(8)(9)のように、真実について作品の中で自問自答したり、「箇中」と、具体物や動作で象徴指示したのだった。唐代の俱胝和尚は人から仏法を問われると、言語は用いずに常に指一本を豎てたという。

③の結句の「一二三四五六七は、先述した無限回帰の毬つきなのである。子供の歌に合せて、くり返し繰り返しかえしく事が、即、仏道の極意なのである。そこで筆者は、⑫の『碧巖録』の圓悟克勤えんごこくきんの下語あきまを想起するのである。

ある僧が智門光祚に質問した。「蓮の花がまだ水の中に埋れている時はどうですか——（釈尊がまだ王城を出奔しない時はどうですか）。すると智門は、「蓮華じゃ——（真理を悟った釈尊じゃ）」と答えた。次に僧が、「水から出ない前が蓮華ならば、水から出るとどうなるのですか——（王城から出奔して修行して証まことった時はどうですか）」と問うと、「荷はすの葉っぱじゃ——（悉達太子じゃ）」

「蓮華未だ水を出ざる時如何」（釈尊出城以前はどうですか）と質問されて、「蓮根れんこん」（悉達太子じゃ）と答えたなら、それは分別的常識的答弁である。智門光祚の答えは、次元を越え常識をぶち破った大宇宙の真言（無位の真人の言葉）である。

この問答を聞いた圓悟克勤は、「一二三四五六七（あたりまえの事）を智門は言って、天下の人に疑惑を抱かせているわい」と批評した。

「天下の人を疑殺す」は禪門特有の逆説的表現である。圓悟の「一二三四五六七は、当り前のままの事が、イコール、真実である事を示す語なのである。以上の七面倒臭い分析をふまえて③の解釈をしながら、拙論を終るところにする。

わしの袖の中の繡毬は、道元様の坐禪蒲団のように、千金の値打ちのある風流の極みの物なのじゃ。考えてみると、衲なまは毬つきの名人で、禪の真実を会得しており、比肩する者はいない。

もし、この毬つき（仏道）の極意のぎりぎりの所を質問されたら、わしは、「はい、一二三四五六七とただありのままの、コレコノ事じゃ」と、くりかえし繰り返しかえし繰り返しかえし

じや。

『毘子』は、良寛さんの真骨頂を表す二十八文字であるのである。

注

- (1) 小稿の良寛の作品は、特に断らない限り、東郷豊治編著『良寛全集』上下（東京創元社刊）による。
- (2) 大関文仲「良寛禅師伝」に、禅師曰、「我言吾志之所欲耳。何声病之知。其有嫻於詩律者、即将為点竄。」とある。
- (3) 柳田聖山氏は、「法華讚」は良寛作ではなく、玉島円通寺の大忍国仙の作品ではないか。むしろ、行間に細かく書き込まれた漢詩句や仮名のコメントが良寛その人のものであろう。（『良寛』十一号「良寛と法華賛」と述べておられる。今後検討すべき重要な提言である。
- (4) 良寛の「雑詩」に、「仏説十二部 部々皆淳真」という用例があり、淳真は仏の教えを讚える語である。
- (5) 『論語』先進篇に、子曰、従我於陳蔡者、皆不及門也。德行、顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。とあり、伯牛は徳行の士であった。
- (6) 木村家蔵のはりませ屏風をはじめ、良寛遺墨には『論語』の語句を抄録したものが多く、主なものは(1)の『良寛全集』上に収められている。良寛は『論語』を相当読みこんでいたのである。
- (7) 細字の全身入草を、中村宗一『良寛の法華転・法華讚の偈』は、「全身の血に燃えてこの稿を草する」と解している（三四頁）が、私はとらない。『大漢和辞典』には、入草は「中原に入ってくるつ、まらぬ品物」とある。常不軽菩薩が遇う人ごとに讃嘆するので、良寛はそれに倣せぬつ、まらぬ者と自卑して、五合庵など草庵に隠れる——と解した方が大愚、良寛の名にふさわしい。良寛詩はもともとと解釈学的研究が必要である。

(8) 略法系を示しておく。数字は日本曹洞宗の世代である。

天童如淨¹、永平道元²、孤雲懷辨³（中略）²²月舟宗胡²³、徳翁良高²⁴□²⁵大忍国仙²⁶、大愚良寛

(9) 西行の、[〃]かしまるしでに涙のかかるかな又いつかはと思ふ心に[〃]に拠る。

(10) 俳諧の系統を図示すると、

松尾芭蕉—各務支考（美濃派）—（中略）—久村暁台—山本以南

北溟

(11) 『株番』に、小林一茶と山本以南の次のような贈答句がある。

やれうつな蠅が手をする足をする（一茶）

そこふむなゆふべの螢のゐたあたり（以南）

以南にも一茶と同じく、弱者の中に自己を見つめる句風があった。

(12) この良寛歌は『万葉集』巻四の[〃]松の葉に月はゆつりぬもみぢ葉の過ぐれや君があはぬ夜ぞ多き[〃]（池辺王宴誦歌）に拠る。

(13) 『海録碎事』、『清異録』によると、唐僧懷素は貧しくて紙が買えず、芭蕉の葉で書を習ったという。良寛はその懷素の書を習ったのであり、因縁を感じる。

(14) 後述の『正法眼蔵画餅』にあるように、芭蕉は背の低い植物と思ひこまれていた。従つて^〇の、芭蕉の樹が雲に届くほど伸びて涼しい、というのは、常識を超越した境涯を吟じているのである。

(15) 後述の『正法眼蔵画餅』によつて、入昼看は入画看として解釈すべきである。旧漢字の畫^{びろ}と畫^えと酷似しているの間違つたのだから。なお他の作品に[〃]宅辺有苦竹[〃]、[〃]窓寒脩竹陰[〃]の句があるので、良寛の庵のそばには脩竹もあつた事が分る。

(16) 佐藤圓『芭蕉と仏教』三頁。

(17) 禅僧の良寛が、「やちまたに物な思ひそ弥陀、仏のものと誓にあふと思へば」良寛に辞世あるかとひと問はば南無阿弥陀仏といふと答へよ」など、多くの浄土欣求の歌を遺していることを、多くの論稿が問題にして取り上げているが、これも宗派の垣根を超えた乞食沙門良寛の信仰と解すべきである。凡知で大愚大智をはかつてはならない。

(18) 良寛の^④は、桂川に入水自殺した父山本以南の辞世歌「蘇迷廬の山をしるしに立て置けば我なきあといつの昔ぞ」に拠る。

(19) 永岡利一「越後からの上州飯盛下女」(『良寛』十三号)。水上勉『良寛を歩く』四頁。

(20) 上田三四一「零と夢 良寛の時空補遺」(『良寛』十号)

(21) 峰村辰典『新潟のわらべ歌』

(22) 昭和六十三年十月七日から十二日まで開かれた「人間良寛・その生涯と芸術展」(名古屋三越デパート)で、「良寛禅師所愛玩自作手毬」が展示された。良寛さんが原田正貞に贈ったものらしく、紅葉などの素朴な刺繍がしてあった。

(23) 『大正新脩大藏経』第十二卷三七頁下段の一部を我流で書き下す。